

レトリック再考

岡田 聡 宏

はじめに

メタファー、字義通りの発話、ルース・トーク、誇張表現の解釈上のプロセスは同一のもので、メタファーに特有のメカニズムは存在しないとのこれまでの立場を Sperber & Wilson は ‘A Deflationary Account of Metaphor’ (Sperber & Wilson, 2006) において改めて強調している。また、これらの発話はすべて一つの連続体を形成し、メタファーと字義通りのいずれの極に属する発話であろうとも同一の推論手順がその解釈に適用されると主張している。「換喩表現と関連性理論」(岡田、1995) や「誇張法と関連性理論」(岡田、1999) などのこれまで行ってきた分析の中で、Sperber & Wilson と同様に、修辞学上の区別にかかわらず、すべての発話が関連性の原理に基づいて同じように解釈されるとの主張をこれまで繰り返してきた。しかしながら、Sperber & Wilson と同一の立場をとりながらも、誇張法、メタファー、換喩等について個々に分析し、全体的な視野で統一的な考察を行ってこなかった。さらに、これまで行ってきた分析は、主に Relevance (Sperber & Wilson, 1986) および ‘Loose Talk’ (Sperber & Wilson, 1991) などの当初の理論に基づくものであり、関連性理論もさらに完成された形へと発展を遂げていることから最新の立場から自らの分析を見直しする必要性が生じてきた。そこで、主に前述の論文 ‘A Deflationary Account of Metaphor’ (Sperber & Wilson, 2006) に準拠し、メタファー、誇張法、換喩等について全体的な視野から整理し直すというのが本稿の目的となっている。

1 メタファー・誇張法・字義的表現

字義通りの発話とは区別し、メタファーや誇張法などには字義的发話とは異なる特別な解釈が行われるという考え方は一般に指示されていると思われる。Griceもメタファー、アイロニー、誇張法などについて他の発話とは異なる扱いをしている。Grice (1991) は、会話を行う際にその会話への参加者が遵守しなくてはならない基本原理を協調の原理 (Cooperative Principle) と呼び、この原理のもとに4つの範疇の格率 (Quantity, Quality, Relation, and Manner) が区別されると述べている。つまりこれらすべての格率が守られるということが会話成立の前提となっている。特に質の格率では、偽と信じることは言わないと規定し、すべての発話が真でなくてはならないと主張している。メタファーなどについては、この字義性の規範が破られることになるが、協調の原理が別のレベル、つまりインプリカチャーにおいて遵守されるとの説明を行っている。例えば、母親が子供に ‘You’re a piglet.’ と言った場合、字義通りに言っているはずはないから「自分が汚い」ということを暗に意図していると子供は考えるというのである。確かに協調の原理は守られているように思われるが、格率に対する違反を想定するという例外的な扱いをレトリック表現に対して行っているのである。

これに対して Sperber & Wilson は、メタファー、字義的发話、ルース・トーク、誇張法はすべて同じ連続体を形成し、同一の過程を経て一様に解釈されるもので、メタファーに特有のメカニズムなどはないと主張している。

- (1) Specific uses of metaphors by individual authors or in given literary genres are indeed worthy of study, and so is the very idea of metaphor as a culturally salient notion with a long, rich history. Still, we see metaphors as simply a range of cases at one end of a continuum that includes literal, loose and hyperbolic interpretations. In our view, metaphorical interpretations are arrived at in exactly the same way as these other interpretations. There is no mechanism specific to metaphor[s], no interesting generalisa-

tion that applies only to them.

Sperber & Wilson (2006: 172)

字義性を発話解釈の前提とする Grice に代表される立場を否定し、メタファーを例外とせず関連性の原理に基づく同一の推論過程が適用されると考えているのである。字義的発話もメタファーも完全に同じプロセスで解釈されるというこの考え方を明示するために、Sperber & Wilson は、以下に引用する表を用いて次の例文について具体的に説明している。

(2) Peter: For Bill's birthday party, it would be nice to have some kind of show.

Mary: Archie is a magician. Let's ask him.

Sperber & Wilson (2006: 188)

「ビルの誕生日パーティーにショーでも行おう」というピーターの提案に対する応答であることから、メアリーの発話は高い関連性を有するものであると考えることができる。ショーに関するピーターの提案と magician という言葉から (d) の意味を語彙項目の中から選び出し、これが (e) の implicit conclusion を求めるための前提となる。さらにこの (e) のインプリカチャーと (f) のエクスプリカチャーから (g) のようなメアリーの伝えたい意味が得られる。以上が字義的発話 (2) を解釈する場合のプロセスであると考えられる。

これに対して次の magician は、コード化された意味より広い意味で使われており、いわゆるメタファーの例と考えることができる。しかし、一般にメタファーと解される (3) のような例も、表 2 のような手順で表 1 と同様に解釈されるのである。

表1 Sperber & Wilson (2006: 189)

(a) Mary has said to Peter ‘Archie is a magician’.	<i>Decoding of Mary’s utterance.</i>
(b) Mary’s utterance is optimally relevant to Peter.	<i>Expectation raised by the recognition of Mary’s utterance as a communicative act.</i>
(c) Mary’s utterance will achieve relevance by addressing Peter’s suggestion that they have a show for Billy’s birthday party.	<i>Expectation raised by(b), given that Mary is responding to Peter’s suggestion.</i>
(d) Magicians (in one lexicalised sense of the term, MAGICIAN ₂) put on magic shows that children enjoy.	<i>Assumption activated both by use of the word “magician” and by Peter’s wish to have a show for Billy’s birthday party. Tentatively accepted as an implicit premise of Mary’s utterance.</i>
(e) Archie could put on a magic show for Billy’s birthday party.	<i>Implicit conclusion derivable from (d), together with an appropriate interpretation of Mary’s utterance, which would make her utterance relevant-as-expected. Tentatively accepted as an implicit conclusion of the utterance.</i>
(f) Archie is a MAGICIAN ₂ .	<i>Interpretation of the explicit content of Mary’s utterance as decoded in(a) which, together with(d), would imply (e). Interpretation accepted as Mary’s explicit meaning.</i>
(g) Archie is a MAGICIAN ₂ who could put on a magic show for Billy’s birthday party that the children would enjoy.	<i>First overall interpretation of Mary’s utterance(explicit content plus implicatures) to occur to Peter which would satisfy the expectation of relevance in(b). Accepted as Mary’s meaning.</i>

表2 Sperber & Wilson (2006: 191)

(a) Mary has said to Peter 'My chiropractor is a magician'.	<i>Decoding of Mary's utterance.</i>
(b) Mary's utterance is optimally relevant to Peter.	<i>Expectation raised by the recognition of Mary's utterance as a communicative act.</i>
(c) Mary's utterance will achieve relevance by addressing Peter's expressed concern about his back pain.	<i>Expectation raised by(b), given that Mary is responding to Peter's complaint.</i>
(d) Chiropractors are in the business of healing back pain.	<i>Assumption activated both by use of the word "chiropractor" and by Peter's worry about his back pain. Tentatively accepted as an implicit premise of Mary's utterance.</i>
(e) Magicians (in one lexicalised sense of the term, MAGICIAN ₁) can achieve extraordinary things.	<i>Assumption activated both by the use of the word "magician" and by Peter's worry that no ordinary treatments work for him. Tentatively accepted as an implicit premise of Mary's utterance.</i>
(f) Mary's chiropractor, being in the business of healing back pain and able to achieve extraordinary things, would be able to help Peter better than others.	<i>Implicit conclusion derivable from(d) and(e), together with an appropriate interpretation of Mary's utterance, which would make her utterance relevant-as-expected. Tentatively accepted as an implicit conclusion of the utterance.</i>
(g) Mary's chiropractor is a MAGICIAN* (where MAGICIAN* is a meaning suggested by the use of the word "magician" in the sense of MAGICIAN ₁ and enabling the derivation of (e)) .	<i>Interpretation of the explicit content of Mary's utterance as decoded in(a) which, together with(d)and(e),would imply(f). Interpretation accepted as Mary's explicit meaning.</i>
(h) Mary's chiropractor is a MAGICIAN*, who would be able to help Peter better than others by achieving extraordinary things.	<i>First overall interpretation of Mary's utterance (explicit content plus implicatures) to occur to Peter which would satisfy the expectation of relevance in(b). Accepted as Mary's meaning.</i>

(3) Peter: I've had this bad back for a while, but nobody has been able to help.

Mary: My chiropractor is a magician. You should go and see her.

Sperber & Wilson (2006: 190)

ピーターの腰の悩みに対する応答であることから、メアリーの発話の高い関連性を有するものであると考えることができる。ピーターの腰の痛みと chiropractor という言葉から implicit conclusion を求めるための前提として (d) を導き出す。また、magician という言葉と誰の手にも負えない、つまり通常の治療は用をなさないというピーターの悩みから (e) を implicit conclusion を求めるための前提として導き出す。さらにこれらの前提 (d) と (e) から (f) のインプリカチャーを得る。また、(g) がメアリーの発話のエクスプリカチャーであると解釈されるが、ここで示されている MAGICIAN* はこの発話を解釈するためにその場限りの意味として調整されたアドホック概念である。我々のコミュニケーションは、コード化された概念をそのまま用いることだけで成立している訳ではない。「ステーキが生だ」という表現では、生のコード化された概念が広げられているし、「熱がある」では病気の状態を示す高熱という意味まで概念が狭められている。このようにコード化された疑念の広めや狭めが行われ意味が伝えられるのである。この場合の MAGICIAN* では、コード化された厳密な意味、例えば「magician は驚くべきことを成し遂げる並外れた能力を持つ」が一般の人間である脊柱指圧師を含むまでに拡張がされているのである。最後に、(f) のインプリカチャーと (g) のエクスプリカチャーから (h) のメアリーが意図した意味が得られる。また、以上のようなインプリカチャーとエクスプリカチャーを得るための解釈上のプロセスについて補足すると、表1および表2において示されているいずれの場合でも、このプロセスは順を追って進行するものではなく部分的に並行して行われ、聞き手による関連性の期待を満たすところまで相互に調整が行われるものであると言える。一般にメタファーと考えられているものも字義的な発話も表によって示されているように完全に同じ過程で解釈されるのである。人によってコード化されている概念が異なる場合があるとも考えられるが、字義的な発話もルースに用いられている

発話も同じプロセスで解釈されるため、この点は全く問題にはならない。例えば、「魔術を用いる者」という意味しかコード化されていない場合では、この意味を広げて理解するし、隠喩的な意味が語彙項目化している場合は、その中から適切な意味を選ぶだけで解釈の手順は変わらない。これらの発話を字義的なものと定義しようともメタファーと定義しようとも聞き手による解釈の手順は同じなのである。そもそも聞き手はいずれが字義的な発話であるか、いずれがメタファーであるかということについて特に意識をせずにこれらの発話を理解するものと思われる。

伝統的レトリックにおいては、メタファーや誇張法などを個々の技法と捉え、それぞれに厳密な定義を下している。しかし現実には、複数の範疇に属すると考えられるような例が少なからずみられる。さらにこれも修辞学上の定義の問題であるが、「ステーキが生だ」のようにいずれの範疇にも属さず、伝統的レトリックでは修辞技法とみなされていない例も多々ある。このようなルース・トークは、Wilson & Sperber (2000) が指摘しているように、厳密にみると真ではないと言えるが、Grice の挙げる格率に対する違反のいずれにも該当しない。また、この「厳密にみれば真ではない」という字義性からの逸脱が通常の会話の中で認識されることはなく、東森・吉村 (2003: 109) の表現を借りれば、「明示的な違反は含んでいない」。明示的な違反は含んでいないということは、メタファーのようにインプリカチャーを導き出すきっかけとはならないのである。以上のことを考えると、Grice の説ではこのルース・トークについて全く説明がなされていないということになるのである。

- (4) In Grice's framework, loose uses ... apparently violate either the maxim of truthfulness or the second maxim of Quality ('Have adequate evidence for what you say'). However, they do not really fit into any of the categories of violation listed in § 1 above.¹ They are not covert violations, designed to deceive the hearer into believing the proposition strictly and literally expressed. They are not like jokes or fictions, which suspend the maxims entirely. One might try to analyse them as floutings: overt violations (real

or apparent), designed to trigger the search for a related implicature (here a hedged version of what was literally said or quasi-said); but the problem is that loose uses are not generally perceived as violating the Quality maxims at all. In classical rhetoric, they were not treated as tropes involving the substitution of a figurative for a literal meaning. They do not have the striking quality that Grice associated with floutings, which he saw as resulting in figurative or quasi-figurative interpretations. Loose talk involves no overt violation, real or apparent; or at least it does not involve a degree of overtness in real or apparent violation which might trigger the search for an implicature.

Wilson & Sperber (2000: 224)

以上のように、伝統的レトリックの定義では複数の範疇に属すると考えられるような例やレトリックとはみなされていないがGrice流の語用論では問題となるルース・トークのような例が多様な言語表現の中では頻繁に使われている。しかし関連性理論では、字義的発話、ルース・トーク、メタファーのそれぞれに固有の特別な解釈プロセスが適用されるのではなく、すべて同じように解釈されると捉えているために、上述の問題点は関連性理論には全く当てはまらない。

メタファーとして考えられるものの例として(3)の‘My chiropractor is a magician’をみてきたが、この例を誇張法の例とみなすこともできる。一般にメタファーには、あるものを表すのに別のものを利用するという性質があるとされているが、象徴を用いたり、共通の特徴を有するものの中で特に顕著な例を用いたりするというこゝもしばしば行われる。このように顕著な例になぞらえるということ自体が誇張した表現に繋がるとも考えられる。したがって、メタファーの中には誇張法の特徴を含んだものがあるように思われる。Sperber & Wilson (2006: 186)は、誇張法もメタファーも同じ連続体をなすもので解釈上の差はないとの見解を示すために以下の例を挙げ説明している。

- (5) Joan is the kindest person on earth.
- (6) Joan is an angel.
- (7) Joan is incredibly kind.
- (8) Joan is a saint.

誇張法では (5) のように、コード化された概念と文脈的に構築される概念との間に量的な差があり、メタファーでは (6) のように、両者の間に質的な差があるためこれが誇張法とメタファーの違いであるともとれる。しかし、(7) と (8) には質・量双方の差が含まれているために、この質と量とによる差という概念では誇張法とメタファーとの違いを説明することができないと Sperber & Wilson は述べている。言い換えると、誇張法とメタファーとの間に大きな差はなく、同じ連続体を形成するものであるため、レトリック上の定義では正確に捉えることができないような例が数多くでてきてしまうのである。以上の主張に補足をすれば、(6) ではコード化された概念と文脈的に構築される概念との間に質的な差があることは確かであるが、人間の優しさを天使に喩えているのであるから一種の誇張表現でもあり、優しさという点からは量的な差もあるとも言える。いずれにせよ、伝統的には別の技法と考えられているこれらの表現も同じ連続体の一部であるために、定義上厳密に区別することが難しくなってしまうのである。このことは次の類例にも言えることである。

- (9) Jim is a genius.
- (10) Jim is a mathematician.
- (11) Jim is a baby.
- (12) 「A さんは、博士だ／学者だ。」
- (13) 「A さんは、観音様だ／仏様だ／地藏菩薩様だ。」

以上挙げた例はすべて誇張法ともとれるし、主語とは異なるものに喩えられたメタファーともとれるものである。²例えば (10) は、ジムの職業が数学者ではないということ为前提として、ジムが算数の問題を瞬時に解いた際に発話され

たとする。(11)では、大人とは思えないような幼い態度をジムがとることがある場合に使用されたとする。これらの例は、レトリックの定義上問題となるかもしれないが、誇張法と捉えようが、メタファーと捉えようが、解釈上のプロセスは同一のものであるために、聞き手はいずれとも意識することなくこれらの発話を理解するものと思われる。例えば(10)では、MATHEMATICIANの概念が数学者ではない者を含むまで広げられ、アドホック概念MATHEMATICIAN*が形成される。また(11)では、BABYの概念が大人を含むまで広げられ、アドホック概念BABY*が形成される。上記(6)と同様に(13)のみ述語の対象が人間の範疇には属さない観音様／仏様／地藏菩薩様となっているが、解釈上のプロセスは他の例と完全に同じである。この解釈のプロセスをもう少し詳しく説明するために、例として(11)についてしてみると、先ず復号化された概念BABYの百科事典的項目から得た「人の言うことを聞かない／理解できない、人に気を使うことができない、自分中心でものごとを考える、いつも注目してもらいたい」等の想定がインプリカチャーを導き出すための前提となる。さらにアドホック概念を含んだエキスプリカチャーと上記の前提から導き出したインプリカチャーによって「ジムは、自分中心で、いつも注目してもらいたい・・・赤ん坊*だ」というような解釈を得るのである。この場合インプリカチャーの前提としての想定によって、結論であるインプリカチャーの内容も決まる。聞き手は関連性の原理に基づいて想定を求めるが、話し手がはっきりと示していない以上は、特定の想定にはっきりと限定するということはないのである。メタファーと誇張法の類似点と解釈のプロセスをみてきたが、ルース・トークも誇張表現と捉えることが可能な場合があるという点を補足したい。Wilson & Sperber (2000)も次の例文について、誇張法であるとみなすこともできると述べている。

(14) Holland is flat.

(15) We have described Mary's remark that Holland is flat as a case of loose use. We could also have described it as a case of hyperbole (i.e. as a trope). After all, taken literally, it would be a gross exaggeration. Nothing of

substance hinges on whether Mary's utterance is categorised in one way or the other. Literal, loose, hyperbolic or metaphorical interpretations are arrived at by exactly same process, and there is a continuum of cases which crosscut these categories.

Wilson & Sperber (2000: 245)

「関東平野は（真っ）平らだ」とか「このステーキは生だ」などのような例は、厳密にみてもとやはり誇張表現を含んでいると言える。しかしながら、このような修辞学上の区分は発話解釈には関与していないのである。これまで考察してきた例は修辞学上の範疇を横断するような性質を持っているが、すべてが字義的発話からメタファーに至るまでの発話解釈と同一のプロセスで解釈されるのである。つまり、発話解釈においては、字義的発話、ルース・トーク、誇張法、メタファーなどの区別は存在せず、すべてが同一のメカニズムで解釈されるのである。

2 連続体としての換喩

Sperber & Wilson (2006: 182) は、コード化された意味より広い意味で使われている表現として 'Holland is flat' などと共に以下の例文を挙げている。

(16) (*Handing someone a tissue*) : Here's a Kleenex.

(17) (*Handing someone a paper napkin*) : Here's a Kleenex.

以上の例では、クリネックス以外のティッシュと紙ナプキンに対してクリネックスという表現を使用している。指示対象はいずれもクリネックスではないが類似した性質を有し、同じ用途に用いることができるものである。確かにこれは 'broadening' の例であるが、視点を変えてみると換喩の例であるとも言える。

(18) Ozawa gave a terrible concert last night.

(19) Napoleon lost at Waterloo.

Lakoff & Johnson (1980: 38)

(20) King Rama IV of Thailand built a summer palace….

(18) と (19) は Lakoff & Johnson (1980) からの引用で、CONTROLLER FOR CONTROLLED の例である。つまり、コンサートを行うのも、戦いに敗れるのもすべて1人でやっている訳ではないが、その代表者の名前を以って表すものである。同じことが (20) にも言え、宮殿建築の作業に直接従事していなくともその代表者であるラーマ4世の名前が使われている。つまり代表者の名を以って関係者を表すという構造が前述のクリネックスの例の構造と類似しているとも言える。代表的な存在であるクリネックスが、同じような性質を持ち同じ用途に用いることのできる他のものを指しているのである。ただし (18)–(20) の例が関係者すべてを指しているのに対し、クリネックスの例では、個々のものを指している。しかし、クリネックスという表現で、クリネックスと同じような性質をもつものの集合に属するいずれのものを指すこともできるし、状況によっては、クリネックスを含むすべてのティッシュをルースに指すこともできる。

(21) We've run out of Kleenex(es).

(22) Some people are listening to iPod/Walkman while working.

「クリネックス」しか購入しないという話者の場合には当てはまらないが、特に製品にこだわらない話者による発話、あるいはあらゆるメーカーのティッシュ製品を扱う販売店の店員による発話であると仮定すると、漠然とすべてのメーカーのティッシュ全体もしくは少なくとも複数のティッシュを指していると考えられる。(22) では、iPod もしくは Walkman が漠然とすべての (ポータブル) ミュージックプレーヤーを指している、もっと厳密に言えば、あらゆるミュージックプレーヤーの内のいずれかを指しているのである。³先の換喩の例 (18) のように代表が代表を含むすべてを同時に指しているという訳ではないかもし

れないが、代表的なミュージックプレーヤーである iPod もしくは Walkman が、アップル社及びソニーの製品を含むあらゆるミュージックプレーヤーのいずれをも指しうるものであり、不特定のいずれかを指している。また、もしあらゆる製品を含んで「iPod の普及率は驚くべきものです」と言ったとすると、より Lakoff & Johnson の換喩の例に近づくと思われる。この例を他の例と合わせて以下に示す。

- (23) (*Handing someone a tissue*) : Here's a Kleenex.
- (24) (*Handing someone a paper napkin*) : Here's a Kleenex.
- (25) We've run out of Kleenex(es).
- (26) Some people are listening to iPod/Walkman while working.
- (27) iPods are spreading at an alarming rate.

つまりこれらの例は、ルース・トークの用法であるが、換喩の用法であるともとることができる。また、復号化された KLEENEX の意味が女性を含む人間を指すまでに広げられた例として Sperber & Wilson (2006: 188) は (28) を挙げているが、これも他の例と同様に換喩的な性質を含んだ表現であると考えることができる。

- (28) We're all human Kleenex to him

これは G. W. Bush が女性のシャツを使って自分のメガネを拭いたとされる場面で用いられた表現である。もし換喩がルース・トークと共通の特徴を持っているとすれば、換喩も他の表現と共に同じ連続体を形成するものであるという可能性がでてくる。換喩であろうとルース・トークであろうと、以上の例はすべて同じプロセスで解釈されるのではないだろうか。(23) (24) (28) では、復号化された概念 KLEENEX が「他のティッシュ」、「紙ナプキン」、「人間」までそれぞれ広げられ、アドホック概念 KLEENEX*、KLEENEX**、KLEENEX***ができていく。(25) では、KLEENEX が「すべて (あるいは複

数)のティッシュ」を表す KLEENEX****まで意味が広げられており、(26)では、IPOD/WALKMAN がいずれのミュージックプレーヤーをも指し得る IPOD*/WALKMAN*にまで意味が広げられている。(27)では、IPOD があらゆる類似製品を含むすべてのミュージックプレーヤーを指す IPOD**にまで意味が拡張されている。

換喩的に使われているとも考えられる例についてみてきたが、今度はレトリックの定義上問題となるような換喩を含む表現について考察してみたい。ある大国に反乱が起こり、実際に火の手があがりなかなか攻撃がやまない状況を考えてみる。このようなコンテキストで、臣下が王に次のように言ったとする。

(29) 火がおさまる気配がありません。

この場合の火は、ルースに使われており、コード化された概念が敵による火を用いた攻撃を含むまでに拡張されていると考えられる。また火を攻撃の象徴と捉えるとこれは、メタファーであるとも解釈できる。さらに、実際に火が攻撃に使われているので、火という象徴的で具体的な一部が攻撃という抽象的な全体を表す換喩ともとれる。レトリックの定義の上でいずれであると判断するにせよ、解釈の方法自体はやはり同じであり、意味の拡張が行われアドホック概念である火*が形成されるのである。もし聞き手において攻撃という概念が語彙項目化されているとしても、同一のプロセスでこのコード化された意味が選ばれるだけである。

レトリック上の定義が解釈に影響を及ぼさないことを示すために換喩を含んだ例文をさらにみてみたい。佐藤信夫(1992:160)は、次の例文について「「村は」という主語が、物理的には、その村の家々とそこに住む人々をさす換喩であることはいまでもない。物理的にあるいは生物的に、ともかく「村」そのものが寝るわけではない。眠るのは人間である。」と説明している。

(30) 道は凍ってゐた。村は寒気の底へ寝静まってゐた。

川端康成『雪国』

村の概念を狭めそれを構成する一部である村人や動物たちを表すという解釈も成り立つ。これならば「全体で一部を表す換喩」に対する説明としては足りるだろう。しかし、ここで「寝静まってゐた」のは、村人だけでなく草木や灯りなどを含むすべてではないだろうか。そう考えると、村という全体で個々の構成要素すべてを指す換喩とも解釈可能であるが、むしろ佐藤が「個々の部分品が集まって構成されている全体を、一個の大きな単体とみなす換喩と見てもよい。」と言っているが、もしかしたらこちらの見方の方が妥当なのかもしれない。換喩であるとした場合、村人と動物たちのみを指すのか、個々の構成要素すべてを指すのか、あるいは個々の構成要素が集まっている全体を一個の大きな単体とみなすのか議論が分かれるところである。換喩上の定義がいかなるものであれ、これをむしろ「寝静まってゐた」がルースに使用された、修辞学上の定義で言えばメタファーに近い例と考えることはできないだろうか。つまり、寝静まるというコード化された概念が厳密には使用できない草木や建物、さらには灯りなどを含む村にあるものすべてのものに対して適用できるまでに拡張されているとも解釈し得るということである。さらには、村の構成要素すべてが実際に寝静まっている訳ではないであろうから、村がルースに使われているとも考えられる。この場合、レトリックの用語を用いれば誇張法となる。レトリック上の定義を試みようと思えばかなり困難なものとなるであろうが、レトリック上の区分は発話解釈に何の関与もしていないため、いずれの定義を用いようとも、解釈上のプロセスは字義的なもの、ルース・トーク、誇張法、メタファーなどと同一のものなのである。

これまでルース・トークと換喩いずれともとれる例やレトリックの定義上問題となる例をみてきたが、すべて同じプロセスで解釈されるということを確認した。Sperber & Wilson も字義的発話、ルース・トーク、メタファー、について、それぞれを正確に区別できる基準がなく、語用論的にはそれぞれを区別する範疇自体が存在しないということ、さらには発話解釈上は、同じプロセスで推論が行われるという点を指摘している。

- (31) We see this continuity of cases, and the absence of any criterion for distinguishing literal, loose, and metaphorical utterances, as evidence not just that there is some degree of fuzziness or overlap among distinct categories, but that there are no genuinely distinct categories, at least from a descriptive, psycholinguistic or pragmatic point of view. Even more important than the lack of clear boundaries is the fact that the same inferential procedure is used in interpreting all these different types of utterance.

Sperber & Wilson (2000: 188)

もし (23)-(28) のルース・トークの例がいわゆる換喩と特徴を共有しているのであれば、また (29) の定義において換喩か、ルース・トークか、メタファーかの中で揺れが生ずるならば、換喩についても前掲の引用と同じことが言えるのではないだろうか。つまり、換喩も字義的発話、ルース・トーク、メタファーと同じ連続体を形成するもので、これらのものすべてがおなじプロセスで解釈されるということである。さらに、「村は寒気の底へ寝静まってゐた」という表現について考察したように、レトリックの定義上やはり揺れが生ずる例でも、それぞれの用法を分ける修辞学的範疇は発話解釈上無関係であるため、この揺れによる影響はまったく受けずに、同一のプロセスで解釈されると言える。

最後に、岡田 (1995: 94) で詩的効果の例として引用した次の表現について考察したい。

- (32) *Cassius*. But what of Cicero? Shall we sound him?

I think he will stand very strong with us.

Casca. Let us not leave him out.

Cinna. No, by no means.

Metellus. O, let us have him; for his silver hairs

Will purchase us a good opinion,

And buy men's voices to commend our deeds.

It shall be said his judgement rul'd our hands;
 Our youths and wildness shall no whit appear,
 But all be buried in his gravity.

Julius Caesar II . i

引用文中の *our hands* も換喩と考えられるが、ここでは下線部のみに焦点を絞って分析する。まず *his silver hairs* であるが *grey hairs* がレトリックの世界では *old age* を表す換喩として確立しているので、ほぼ間違いなく換喩の例であると言える。岡田 (1995) でも否定したように、*grey hairs* = *old age* という一対一の機械的連想関係から *old age* という意味のみが得られる訳ではなく、コンテクストから推論により関連性の原理に一致した解釈を聞き手 (読み手) は得ようとするのである。もちろん聞き手 (読み手) の中には *silver hairs* の意味が *old age* として語彙項目化されている場合もあるだろうが、そのコード化された意味を解釈として得るだけではない。まず *silver hairs* から老齢という意味に加えて慎重さ、沈着冷静さ、賢明さなどの意味が百科事典の項目から得られインプリカチャーを導き出すための前提となる。さらにこの髪はシセローの (シセローが生やしている) ものであり老齢と苦労の結果白髪 (銀髪) になったものであるという意味の狭めも行われるかもしれない。さらにインプリカチャーとの相互調整によりシセローという所有者自身を指すアドホック概念が形成されるとも考えられる。また解釈上厄介なことに *silver* が *purchase* の縁語となっている。この縁語の取り扱いについては今後より慎重な検討が必要であるが、現時点で示し得る説明を行う。1つの発話が2つの異なる解釈を持つことは通常考えられないことのように思われるが、実際には駄洒落や掛詞などのように伝達者が2つの解釈を意図している場合には、やはり受信者も2つの解釈を得ようとするのではないだろうか。この縁語の影響で動詞 *purchase* に繋がり老齢で慎重で・・・賢明でありさらに貴金属としての銀 (もしくは銀貨) の意味を含む白髪頭のシセローが人々の評価と賞賛を得ることになる。ここで *purchase* と *buy* が通常買うことができない *opinion* や *voices* に対して使用されていることから、おそらくこれらの語はルースに使われているものと思われる

る。以上に示したインプリカチャーとそれを導き出すための前提は複数得られるが、いずれのものが聞き手によって受け入れられるかははっきりとは分からない。つまり解釈を得るためには労力がかかるが、弱く含意される複数の弱いインプリカチャーという高い効果を得ることのできる詩的効果の例であると言える。

- (33) Let us give the name Poetic effect to the peculiar effect of an utterance which achieves most of its relevance through a wide array of weak implicatures.

Sperber & Wilson (1995: 222)

このような詩的効果を含む表現では、大きな労力が必要とされるが、その分聞き手は弱く含意される複数の弱いインプリカチャー、つまり高い効果を得ることができるのである。詩的効果を持つ表現として『ジュリアス・シーザー』から引用し、1つの解釈方法を示したが、この点についてはさらに詳しい検討が必要であると思われる。しかしながら、レトリック上の区分とは関係なく字義的発話、ルース・トーク、誇張法、メタファーなど同一のプロセスでこの例も解釈されるものであると言える。

おわりに

修辞学上メタファーや誇張法は別の範疇に属し、それぞれが独特の特徴を有するものと考えられてきた。グライス流の語用論においても、字義的な発話とは区別し、質の格率に対する違反を経由してインプリカチャーとして回復されるものであると説明している。しかし発話解釈上は、字義的発話、ルース・トーク、誇張法、メタファーをそれぞれ区別する固有の範疇は存在せず、すべてが同一のプロセスで一様に解釈される。Sperber & Wilson (2006) の分析では特に換喩については言及されていなかったが、本論では換喩も字義的発話、ルース・トーク、誇張法、メタファーと同じ連続体を形成するもので解釈上のメカニズムは同一であるとの見解を示した。もし (23)-(28) のルース・トークの例

がいわゆる換喩と特徴を共有していると言えるならば、これらを換喩の例とみなすこともできる。定義上の区別は重要ではないが、もしこれらの例がルース・トークとも換喩ともとれるならば、換喩も他と同じ連続体を形成する可能性がでてくるのである。この換喩と特徴を共有する例に加え、ルース・トークかメタファーかの間で揺れが生ずる例や、さらには修辞学上の定義が適切に当てはまらないような例の分析を通して、それぞれの用法を分ける範疇は発話解釈には全く関与することはなく、同一の解釈上のプロセスが適用されるという点を繰り返し強調してきた。最後に、詩的效果を生み出す換喩を含んだ表現の分析を通して、まだ不完全ではあるが1つの分析の方法を示した。また、換喩も字義的発話やルース・トークと同じ連続体を形成するとの立場に基づき、換喩による詩的效果にも他の発話と同じ解釈上のプロセスが用いられることも明らかにした。

修辞学的定義上換喩とみなされる表現を含んだ文の詩的效果に触れたところで、最後に一点補足し本稿を締め括りたい。詩的效果は前述の通り複数の弱いインプリカチャーを得ることによって達成される効果であるが、必ずしも換喩やメタファーなどレトリックの用法を含む必要はない。メタファーの中には字義的な発話より容易に理解されるものが多々あり、すべてが詩的效果に結びつく訳ではない。この詩的效果は、字義的な発話によっても達成されるものである。

- (34) Many metaphors are very easy to process, while, as any science student knows, arriving at an adequate literal understanding of a statement may take much more effort than a loose or even metaphorical construal. Nor is it that literal expression is intrinsically less capable than metaphor of achieving poetic effects, as the comparison between Bashō's haiku and Sandburg's haiku-like poem shows.

Sperber & Wilson (2006: 201)

Sperber & Wilson (2006: 197) は次の芭蕉の句を引用し、字義的な描写が様々な

含意を持ち、これが相俟って風景、季節、時などを表すと主張する。

- (35) On a leafless bough
A crow is perched –
The autumn dusk

字義的発話によってもメタファーなどと同様に詩的效果を生み出す力があるという Sperber & Wilson の考え方を支持するために、同じく芭蕉の俳句を考察する。

- (36) 田一枚植ゑて立去る柳かな

この句も、季節（「田植」から語彙項目化された意味「夏五月」を選ぶ）、田一枚植えて立去るまでの時間、西行が歌に詠んだ柳から西行と西行の和歌（柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ）への暗示引用と感慨などの複数の様々な含意が得られる。さらに、「立去る」の解釈であるが、これにも俳句ならではの技巧が凝らされている。「立去る」の主語は早乙女で、田を植え終えてから「立去る」のであるが、もう1つの主語芭蕉も掛かっており、西行ゆかりの柳のもとを名残惜しげに芭蕉が「立去る」のでもある。このように芭蕉によるシンプルな字義通りの俳句が極めて複雑で多層的な解釈を生み出しているのである。

以上のように字義的発話も詩的效果を持つことができ、複数の含意を伝えることによって高い関連性を達成することができるのである。字義通りの発話がメタファーと同じ詩的效果を持つということは、この効果はメタファーに固有の効果ではないということを示している。また、メタファーが必ずしも詩的效果を生み出すものではなく、字義通りの発話よりも容易に理解されることが少なからずある。人間のコミュニケーションにおいては、字義通りの発話が基本でもなければ、メタファーが規範からの逸脱でもない。さらにメタファーや誇張法、換喩などの解釈には、修辞学的立場とは大いに異なり、それぞれに固有の特殊なメカニズムは存在しないのである。字義通りの発話、ルース・トーク、

メタファー、そして換喩は同じ連続体を形成するもので、それぞれを他と分ける固有の範疇は存在せず、すべての発話が同一のプロセスで解釈される。

注

- 1) 格率に対する違反は以下の通りである。

Lies are examples of covert violation, where the hearer is meant to assume that the maxim of truthfulness is still in force and that the speaker believes what she has said. Jokes and fictions might be seen as cases in which the maxim of truthfulness is overtly suspended (the speaker overtly opts out of it); the hearer is meant to notice that it is no longer operative, and is not expected to assume that the speaker believes what she has said. Metaphor, irony and other tropes represent a third category: they are overt violations (floutings) of the maxim of truthfulness, in which the hearer is meant to assume that the maxim of truthfulness is no longer operative, but that the supermaxim of Quality remains in force, so that some true proposition is still conveyed.

Wilson & Sperber (2000: 218)

- 2) すべての例において、厳密には、主語の人物が述語となっている対象ではないということを前提としている。例えば、(11) の Jim は赤ん坊ではなく大人であるということをも前提としている。
- 3) iPod および Walkman がルースに使われており、指示対象がアップル社およびソニーの製品のみに限定されていないと仮定する。

参考文献

- Carston, R. (2002a) 'Metaphor, ad hoc concepts and word meaning - more questions than answers'. *UCL Working Papers in Linguistics* 14. 83-105.
- Carston, R. (2002b) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell, Oxford.
- Grice, P. (1991) 'Logic and conversation'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. 305-315. Oxford: Oxford University Press.

- Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. (1991) 'Loose talk'. In S. Davis. (ed.) *Pragmatics*. 540-590. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson. (2006) 'A deflationary account of metaphor'. *UCL Working Papers in Linguistics* 18. 171-203.
- Wilson, D. and D. Sperber. (2000) 'Truthfulness and relevance'. *UCL Working Papers in Linguistics* 12. 215-257.
- Wilson, D. and D. Sperber. (2004) 'Relevance theory'. In L. Horn & G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. 607-632. Blackwell: Oxford.
- 岡田聡宏 (1995) 「換喩表現と関連性理論」『英語語法文法研究』2号 87-99
- 岡田聡宏 (1999) 「誇張法と関連性理論」『白鷗女子短大論集』24巻第1号 27-45
- 佐藤信夫 (1996) 『レトリック認識』講談社学術文庫
- 野内良三 (2002) 『レトリック入門—修辞と論証—』世界思想社
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』研究社
- 久富哲雄 (2006) 『おくのほそ道』講談社学術文庫

Rethinking Rhetoric

Toshihiro Okada

Tropes such as metaphor, hyperbole, and metonymy make up distinct categories in the traditional rhetoric. Also in Gricean pragmatics, these utterances are treated differently from literal ones. Grice suggests, for example, metaphorical utterances overtly violate the maxim of truthfulness, and this violation triggers the recovery of implicature. As Sperber & Wilson (2006: 172), on the other hand, “see metaphors as simply a range of cases at one end of a continuum that includes literal, loose and hyperbolic interpretations”, there is no mechanism specific to these utterances and they are all interpreted in exactly the same process. Nor is metonymy an important notion in the study of verbal communication, and there is no mechanism specific to it either, because there is a continuum of cases between loose uses and metonymical utterances, and metonymical utterances are interpreted in exactly the same way as other utterances. The main aims of this paper are firstly, to reanalyze rhetorical utterances including metonymy as well as other tropes on the latest theory of *Relevance*, especially Sperber & Wilson (2006); and secondly, to show that exactly the same inferential procedure applies to metaphoric, hyperbolic, loose, and metonymical utterances as well as literal ones, irrespective of their rhetorical definitions.